

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリヤはか
 番兵 死 者 如 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね
 立 爾 潔 體 尋

たあり。なんぢはぢごくにいざなわれず
 爾 地獄 誘

して、ぢごくをとりこにし、いのちをた賜
 地獄 虜 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。
 者 處女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにきいす。
 爾 歸

【 グリゴリイ・パラマのトロパリ 第8調 】

せいきょうのとしび、きょうかいのかため
 正 教 燈 教 會 保 固

およびきょうし、しゅうしらのかざり、しんがく
 及 教 師 修 士 等 飾 神 學

し の うち の か た れ め ぐ ん し 、 き せ き し ゃ グ リ
 師 中 勝 軍 士 奇 跡 者
 ゴ リ イ、 テ ッ サ ロ ニ カ の ほ ま れ 、 お ん ち ょ う の で ん
 ゴ リ イ、 テ ッ サ ロ ニ カ の ほ ま れ 、 お ん ち ょ う の で ん
 譽 恩 寵 傳
 ど う し よ 、 わ れ ら の た ま し い の す く わ れ ん こ
 道 師 我 等 靈 救
 と を つ ね に い の り た ま え 。
 常 祈 給

【 グリゴリイ・パラマのコンダク 第8調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 。
 光 榮 父 子 聖 神 歸
 し い ん げ ん し ゃ グ リ ゴ リ イ よ 、 わ れ ら な ん ぢ え い ち の
 神 言 者 我 等 爾 睿 智
 せ い に せ ら れ し し ん み ょ う な る き か ん 、 し い ん が く
 聖 神 妙 機 關 神 學
 の こ う め い な る ラ ッ パ た る も の を ど う し ん に か し ょ
 光 明 角 者 同 心 歌 頌
 う し て い の る 、 し い ん ぶ よ 、 げ ん し の ち え の
 祈 神 父 原 始 智 慧
 ま え に た つ ち え と し て 、 わ れ ら の ち え を か
 前 立 智 慧 我 等 智 慧 彼

れにむかわしめたまえ、われらがよばんた
向 給 我 等 呼 爲
めなり、おんちやうの でんどうしよ、よろ
恩 寵 傳 導 師 慶
こ べ。

【 大齋第二主日のコンダク 第4調 】

いまもいつうもよよに、アミン。
今 何 時 世 世
いまきんぎやうのときはあらわれたあり、
今 勤 行 時 顯
しんぱんはもんのかたわらにあり、ゆえにたち
審 判 門 側 故 起
てもものいみし、しょうかんのなみだときょうじゅつと
齋 傷 感 涙 矜 恤
をささげてよおばん、われらはうみの
捧 呼 我 等 海
まさごよりおおくつみをおこなえり、
砂 多 罪 行
もとむ、ばんゆうのぞうせいしゅよ、ゆるし
求 萬 有 造 成 主 赦

た ま え 、 わ れ ら が ふ き ゆ う の え い か ん を う け ん
給 我 等 不 朽 の 榮 冠 受

た め な り 。
爲

【 聖三の歌 】

代禱) ^{しゅ}主よ、^{けいけん}敬虔なる^{もの}者を^{すく}救い、^{およ}及び^{われら}我等に^き聆き^{たま}給え、

しゅ よ 、 け い け ん な る も の を す く い 、 お よ び わ れ
主 敬 虔 者 救 及 我

ら に き き た ま え 。
等 聆 給

代禱) ^よ世に、

ア ミ ン。

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 あわれめよ。

【 提綱 (プロキメン) 主日第5調 及び 成聖者の第1調 】

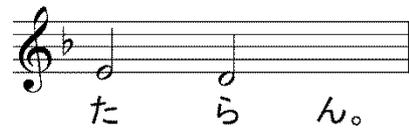
代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しゅ} プロキメン、^{なんぢ} 主よ、^{われら} 爾は我等を保ち、^{われら} 我等を護りて、^{こよ} 斯の世より永遠に^{えいえん} 至らん、^{いた}

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我等 保 我等 護



誦經) ^{しゅ われ すく たま けだしぎじん た} 主よ、我を救い給え、蓋義人は絶えたり、



誦經) ^{わ くち えいち いだ わ こころ おもい ちしき いだ} 我が口は睿智を出し、我が心の思は智識を出さん、



【 使徒經 (アポストロス) 304 端 エウレイ書1章10節~2章3節 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しょ よみ} 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

代禱) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{しゅ なんぢはじ ち もとづ てん なんぢ て わざ これら ほろ しか なんぢ} 主よ、爾初めに地を基けたり、天も爾が手の造工なり。此等は亡びん、然れども爾

^{なが そん これら みなころも ごと ふる なんぢいふく ごと これ ま これら かわ しか} は永く存す、此等は皆衣の如く古び、爾衣服の如く之を捲き、此等は易らん、然

^{なんぢ かわ なんぢ とし おわ しみ いづれ てんし むか かつ い} れども爾は易らず、爾の年は終らざらんと。神は何の天使に對いて曾て云いしか、

^{なんぢわ みぎ ぎ わ なんぢ てき なんぢ あし だい な いた かれら みなほうじ しん} 爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の凳と爲すに迄れと。彼等は皆奉事する神、

つかわ すくい つ 物のため えきじ もの あら こ ゆえ われらき ところ
遣 されて、救 を嗣がんとする者の爲に役事する者に非ずや。是の故に我等聞きし 所 を
もつともつつし おそ あるい はな お けだしも てんしら よ つ ことば かた
尤 慎 むべし、恐らくは 或 は 離れ落ちん。蓋 若し 天使等に藉りて告げられし 言 は 堅
た およそ いはい ふじゅん こうせい むくい う われらか ごと すくい かえり
く立ちて、凡 の違背と不 順 とは公 正の 報 を受けしならば、我等此くの如き 救 を 願
みずして、如何ぞ 追るるを得ん。斯れ 始 主に因りて傳えられ、彼より聞きし者に因りて我
ら うち かた た かみ よ そのむね したが きゅうちよう きせき しゅじゅ いのう およ
等の中に堅く立てられ、神に縁りて、其 旨に 循 いて、休 徴、奇蹟、種 種の異能、及
せいしん ぶんよ もつ しょう
び 聖 神の分予を以て 證 せられたり。

(比較用 口語訳) 「主よ、あなたは初めに、地の基をおすえになった。もろもろの天も、み手のわざである。これらのものは滅びてしまうが、あなたは、いつまでもいますかたである。すべてのものは衣のように古び、それらをあなたは、外套のように巻かれる。これらのものは、衣のように変わるが、あなたは、いつも変ることがなく、あなたのよわいは、尽きることがない」とも言われている。神は、御使たちのだれに対して、「あなたの敵を、あなたの足台とするときまでは、わたしの右に座していなさい」と言われたことがあるか。御使たちはすべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたものではないか。こういうわけだから、わたしたちは聞かされていることを、いっそう強く心に留めねばならない。そうでないと、おし流されてしまう。というのは、御使たちをとおして語られた御言が効力を持ち、あらゆる罪過と不従順とに対して正当な報いが加えられたとすれば、わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしかれ、さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである。

【 使徒經 (アポストロス) 318 端 エウレイ書 13 章 17 節~21 節 】

代禱) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエウレイ 人に達する書の讀、

代禱) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、凡 の司祭 長 は 禮物と祭祀とを獻ずるが爲に立てらる、故に彼も亦 獻ず
べき物なかるべからざりき。彼若し地に在りしならば、司祭と爲らざりしならん、蓋 此には
りつぼう したが ささげもの けん しさいら てんじょう もの かたち かげ ほうじ もの
律法に 循 いて 禮物を獻ずる司祭等、天 上の者の 形 と影とに奉事する者あり、モ
そのまく つく とき つ ごと いわ つつし やま おい なんぢ しめ
イセイに其 幕を造らんとせし時に、告げられしが如し、曰く、 慎みて山に於て爾を示

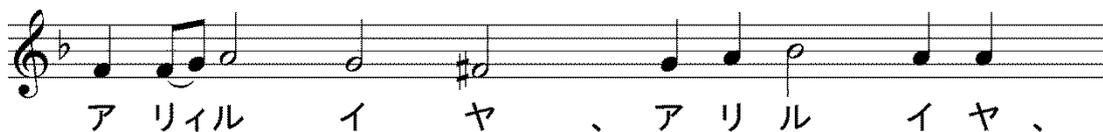
のり したが いっさい つく しか かれ いまさら まさ ほうじ え さらに
 されし式に 遵いて、一切を造れと。然れども彼が今 更に優れる奉事を得たるは、更に
 よ きよやく もとづ さらに よ やく ちゅうほしや な かな
 善き許約に 基ける更に善き約の中 保者と爲りしに稱う。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。おおよそ、大祭司が立てられるのは、供え物やいけにえをささげるためにほかならない。したがって、この大祭司もまた、何かささぐべき物を持っておられねばならない。そこで、もし彼が地上におられたなら、律法にしたがって供え物をささげる祭司たちが、現にいるのだから、彼は祭司ではあり得なかったであろう。彼らは、天にある聖所のひな型と影とに仕えている者にすぎない。それについては、モーセが幕屋を建てようとしたとき、御告げを受け、「山で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい」と言われたのである。ところがキリストは、はるかにすぐれた務を得られたのである。それは、さらにまさった約束に基いて立てられた、さらにまさった契約の仲保者となられたことによる。

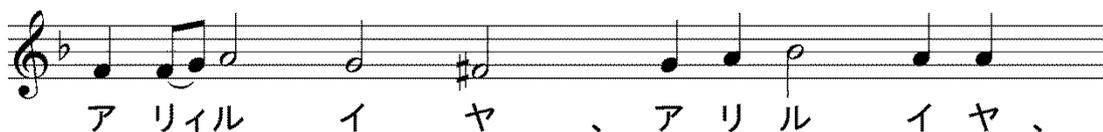
【 アリルイヤ 主日第6調 及び 成聖者の第2調 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、



誦經) ^{しじょうしゃ おおい した おもの ぜんとうしゃ かげ した やす} 至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、



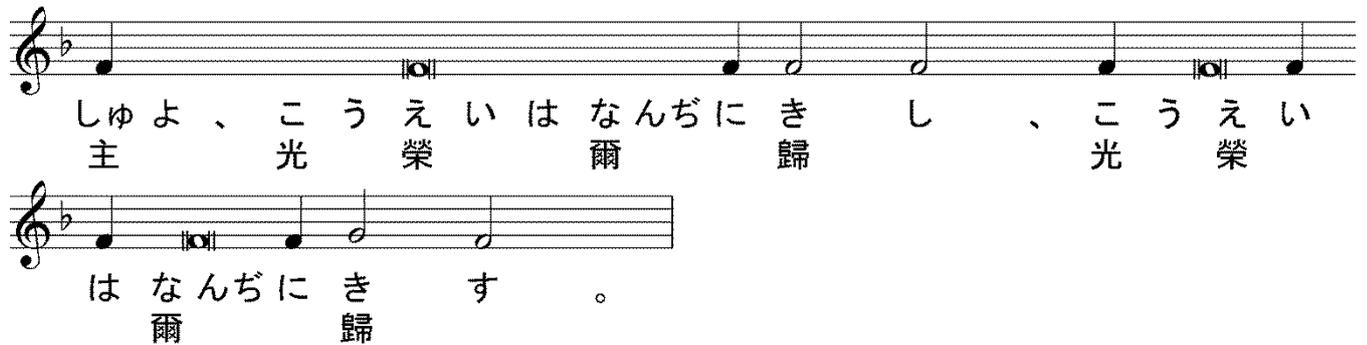
誦經) ^{ぎじん くち えいち い そのした ぎ かた} 義人の口は睿智を言い、其舌は義を語る、



【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書7端 2章1~12節 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) マルコ^{でん}傳の^{せいふくいんけい}聖福音經の^{よみ}讀、



代禱) ^{つつし} 謹 ^{みて} みて ^き 聴くべし、^か 彼の ^{とき} 時 ^い イイスカペルナウムに ^い 入り、^{かれ} 彼が ^{いえ} 家に ^あ 在ること ^{きこ} 聞えたれば、

^{ただち} 直に ^{おお} 多くの人 ^{ひとあつま} 集りて、^{もん} 門の ^{かたわら} 傍にも ^み 身を容る ^い 處 ^{いた} なきに ^{かれ} 至れり、^{これ} 彼は ^{おしえ} 之に ^の 教を宣

べたり。^{ちゅうぶう} 癩 ^{もの} 瘋の者 ^{たづさ} を ^{かれ} 攜 ^{きた} えて、^{よに} 彼に ^{これ} 來れる ^か あり、^{ひと} 四人 ^{おお} 之を ^よ 昇けり、^よ 人の衆 ^お きに ^お 困りて、

^{かれ} 彼に ^{ちか} 近づく ^え を得ずして、^{そのあ} 其在る ^{ところ} 處 ^{やね} の屋蓋 ^{ひら} を ^{これ} 啓 ^{あな} き、^{ちゅうぶう} 之に ^{もの} 穴 ^ふ して、^{とこ} 癩 ^{もの} 瘋の者 ^の 臥したる ^{とこ} 牀

を ^つ 縋 ^{おる} り下せり。^{かれら} イイス ^{しん} 彼等の ^み 信 ^{ちゅうぶう} を ^{もの} 見て、^い 癩 ^こ 瘋の者 ^{なんぢ} に ^{つみ} 謂 ^{なんぢ} う、^{ゆる} 子よ、^{ゆる} 爾 ^{ゆる} の罪 ^{ゆる} は ^{ゆる} 爾 ^{ゆる} に ^{ゆる} 赦 ^{ゆる} さ

る。^{ここ} 此に ^{ある} 或 ^{がく} 學士 ^ら 等の ^ざ 坐せる ^{ところ} あり、^{うち} 心 ^ぎ の中 ^{いわ} に ^こ 議 ^{ひと} して ^{なん} 曰 ^い く、^{ひとり} 斯 ^{ひとり} の人 ^{ひとり} 何 ^{ひとり} ぞ ^{ひとり} 斯 ^{ひとり} く ^{ひとり} 褻 ^{ひとり} 流 ^{ひとり} を ^{ひとり} 言 ^{ひとり} う、^{ひとり} 獨

^{かみ} 神 ^{ほか} より ^{たれ} 外 ^{つみ} に、^{ゆる} 誰 ^え か ^{そのしん} 罪 ^{もつ} を ^{ただち} 赦 ^{かれら} す ^か を ^{おのれ} 得 ^{うち} ん。^{ゆる} イイス ^{ゆる} 其 ^{ゆる} 神 ^{ゆる} を ^{ゆる} 以 ^{ゆる} て、^{ゆる} 直 ^{ゆる} に ^{ゆる} 彼 ^{ゆる} 等 ^{ゆる} が ^{ゆる} 斯 ^{ゆる} く ^{ゆる} 己 ^{ゆる} の ^{ゆる} 表 ^{ゆる} に

^ぎ 議 ^し する ^{かれら} を ^い 知 ^{なんぢ} りて、^{なんぢ} 彼 ^{ところ} 等に ^{うち} 謂 ^か えり、^ぎ 爾 ^{ちゅうぶう} 等 ^{もの} 何 ^{なんぢ} ぞ ^{なんぢ} 心 ^{なんぢ} の ^{なんぢ} 中 ^{なんぢ} に ^{なんぢ} 斯 ^{なんぢ} く ^{なんぢ} 議 ^{なんぢ} する、^{なんぢ} 癩 ^{なんぢ} 瘋 ^{なんぢ} の ^{なんぢ} 者 ^{なんぢ} に、^{なんぢ} 爾 ^{なんぢ} の

^{つみゆる} 罪 ^い 赦 ^{ある} さると ^い 言 ^お い、^{なんぢ} 或 ^{とこ} は ^と 起 ^ゆ きて、^い 爾 ^い の ^い 牀 ^い を ^い 取 ^い りて ^い 行 ^い けと ^い 言 ^い うは、^い 孰 ^い か ^い 易 ^い き。^い 然 ^い れ ^い ど ^い も ^い 爾

^ら 等 ^{ひと} が ^こ 人 ^ち の ^あ 子 ^{つみ} の ^{ゆる} 地 ^{けん} に ^し 在 ^{ため} りて ^{ちゅうぶう} 罪 ^{もの} を ^{むか} 赦 ^{いわ} す ^{いわ} 權 ^{いわ} ある ^{いわ} こと ^{いわ} を ^{いわ} 知 ^{いわ} らん ^{いわ} 爲 ^{いわ} 、^{いわ} (^{いわ} 癩 ^{いわ} 瘋 ^{いわ} の ^{いわ} 者 ^{いわ} に ^{いわ} 向 ^{いわ} いて ^{いわ} 曰 ^{いわ} く、)

^{なんぢ} 爾 ^い に ^お 謂 ^{なんぢ} う、^{とこ} 起 ^と きて、^{なんぢ} 爾 ^い の ^ゆ 牀 ^ゆ を ^ゆ 取 ^ゆ りて、^ゆ 爾 ^ゆ の ^ゆ 家 ^ゆ に ^ゆ 往 ^ゆ け。^ゆ 彼 ^ゆ 直 ^ゆ に ^ゆ 起 ^ゆ き、^ゆ 牀 ^ゆ を ^ゆ 取 ^ゆ りて、^ゆ 衆

の^{まえ}前に^{おい}於^いて出^{しゅう}でたり、衆^{おどろ}駭^{かみ}きて、神^{さん}を讚^{えい}榮^{われ}し、我^ら等^{いま}未^{かつ}だ嘗^かて斯^{ごと}くの如^みきことを見^みざりきと云^いうを致^{いた}せり。

(比較用 口語訳) イエスがまたカペナウムにお帰りになったとき、家におられるといううわさが立ったので、多くの人々が集まってきて、もはや戸口のあたりまでも、すきまが無いほどになった。そして、イエスは御言を彼らに語っておられた。すると、人々がひとりの中風の者を四人の人に運ばせて、イエスのところに連れてきた。ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエスのおられるあたりの屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。ところが、そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言い、中風の者にむかって、「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。

【 福音經 (エヴァンゲリオン) イオアン福音書 36 端 10 章 9～16 節 】

誦^{しゅ}經^{かれ}主^{きた}は彼^{じん}に來^いれるイウ^{われ}デヤ^{もん}人^{われ}に謂^よえり、我^いは門^{もの}なり、我^えに由^{すくい}りて入^える者^{かつい}は救^えを得^え、且^{かつい}入^えり且^え出^えでて、草^{くさ}場^ばを得^えん。盜^{ぬす}の來^{きた}るは、唯^{ただ}盜^{ぬす}み、殺^{ころ}し、滅^{ほろ}さん^ぼ爲^{ため}のみ。我^{われ}の來^{きた}りしは、其^{その}生命^{いのち}を有^{たも}ち、且^{かつ}豐^{ゆた}に之^{これ}を有^{たも}たん爲^{ため}なり。我^{われ}は善^よき牧^{ぼく}者^{しゃ}なり、善^よき牧^{ぼく}者^{しゃ}は己^{おのれ}の生命^{いのち}を羊^{ひつじ}の爲^{ため}に捐^すつ。牧^{ぼく}者^{しゃ}ならざる傭^や者^{といびと}、羊^{ひつじ}の己^{おのれ}に屬^{ぞく}せざる者^{もの}は、狼^{おおかみ}の來^{きた}るを見て、羊^みを棄^{ひつじ}て逃^すぐ、狼^{おおかみ}は羊^{ひつじ}を奪^{うば}い、又^{また}之^{これ}を散^{ちら}す。傭^や者^{といびと}は逃^にぐ、其^{その}傭^や者^{といびと}たるを以^{もつ}てなり、羊^{ひつじ}を顧^{かえり}みず。我^{われ}は善^よき牧^{ぼく}者^{しゃ}にして、我^{われ}に屬^{ぞく}する者^{もの}を識^しり、我^{われ}に屬^{ぞく}する者^{もの}も亦^{また}我^{われ}を識^しる。父^{ちち}の我^{われ}を識^しるが如^{ごと}く、我^{われ}も亦^{また}父^{ちち}を識^しる、且^{かつ}我^{われ}が生命^{いのち}を羊^{ひつじ}の爲^{ため}に捐^すつ。我^{われ}に又^{また}他^たの羊^{ひつじ}、此^この牢^{おり}に屬^{ぞく}せざる者^{もの}あり、我^{われ}は彼^{かれ}等^らをも引^ひくべし、彼^{かれ}等^らは我^{われ}が聲^{こえ}を聽^きかん、而^{しかう}して一^{ひとつ}の群^{むれ}一^{ひとつ}の牧^{ぼく}者^{しゃ}と爲^ならん。

(比較用 口語訳) わたしは門である。わたしをとおってはいる者は救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。羊飼ではなく、羊が自分のものでもない雇人は、おおかみに来るのを見ると、羊をすてて逃げ去る。そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。彼は雇人であって、羊のことを心にかけていないからである。わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている。それはちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。そして、わたしは羊のために命を捨てるのである。わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、つい一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸

※代式祈祷③ へ